

「いわんや悪人をや」

藤元正樹師述

このテーマは最初に申し上げたように歎異抄に出ている宗祖の御言葉から取上げられたものです。真宗が悪人正機の教であるといわれる根拠になるお言葉です。悪人と云ふのは凡そ救い様のない人間ということです。けれども、そうなる善人は救われるけれども悪人は救われないと云ふことになりません。善人と云ふのは善い事の出来る能力を持てる人と云ふことです。仏教で善悪と云ふときと一般的な社会的価値としての善悪とは、その判断の基準になるものが異なります。人間はただ生きているというだけではありません。生きるということには、生きて有るということです。ですから、これを存在と云います。存在時間的な意味です。在は空間的な意味です。生きていくということは、いつかという時間と、どこかと云ふ空間をしめています。間というのは関係を意味します。つまり、生きているということは、何かの関係の中で生きているということです。そこに、その関係において善悪という価値が問われるのです。人間と人間との関係を社会関係と云います。そこでの価値関係としての善悪は、まあ一と昔は、仁・義・礼・智・信といわれました。これを五常と云ふのであります。儒教による善悪の価値基準です。五倫と云ふのは、五つの人間関係です。父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼

の序、朋友の信を言います。五常は人間の実行すべき五つの道をあげたものです。五行とも云います。まあ、それが幕府の封建体制を支えた社会秩序であり、人間の理念であります。

まあ、今日でもこのような五倫とか五常という考え方を守って生きている人がないわけではありません。仁とか義とか礼、智、信というのは、今日でも必ずしも悪徳と云うわけではないでしょう。そして、五倫というような人間関係の特定のとらへ方で必ずしも全部ダメと云ふわけではない。けれども、こうした人間関係付けというものが、人間というものの自然のあり方とは違っていることは確かです。自然なあり方と云ふことですが、これは人間というもの、あるままのあり方ということなんです。(例えば、この五倫は、夫婦の別というようなことがあります。)自然でないということは、世間態(てい)というたら一番よいかも知れません。まあ、世間様ということをよく云われました。世間様にわらわれる、とか、世間態が悪いとか、という時には、世間の常識としての五常に反していることでもあります。そんな時には、世間の常識というものが善とか悪というものについての判断の基準になることをあらわしています。

ですから、善悪の規準としての正しいことか正しくないことかは、すべて世間は正しいことと前提されていたわけです。自分の考えよりも世間の一般的な考え方というものの方が正しいのでありますから、自分にとって正しいと思われることでも、世間の考え方を優先しますか

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがえして、他力をたのみたまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなれることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。

ら、自分の思いを辛抱しなければならなかったわけです。まあ、辛抱と云ふことも大事ですけど、逆に世間の考え通りにすれば、波風を起すことがないわけですから、何事も世間態を中心を考えることになりました。その方が安全であるということになるわけです。その世間を規準に考えますと、自分が自分で生きているのだと云ふことが無くなって終います。五倫という人間関係をどの様にうまく調整するかということ、生れたのが五常でありましょう。

だから、浄土に生れると云ふても、やっぱりよいことをして、悪いことをしない様にすると云ふても、人の間における善い事であり、悪いことであるということになります。善い事は世間様の評価ということになります。そこに社会秩序としての、道徳の理念が示されることになるのであります。

ですから、此の世で善悪を云ふ時は、此の世の平穏なことが先ず第一に考えられた上で、善悪が極められるわけです。村の中でも家の中でも、村や家これを器世間といいます。器としての世間です。社会関係であり、社会秩序であります。

けれども、仏の国、浄土と云ふ場合は、同じ器でも仏様の本願の酬報せられた社会です。仏様の修行に由って形成せられた国であるということですから、善悪と云ふものによつて形成されているわけではありません。

善悪という此の世の秩序は、上下の差別階級の論理です。つまり、目上の人か目下の人か

で、善悪は決められます。目上の方の考え方が善で、下の人の考え方は悪なのです。学校だったら、先生は善人で生徒は悪人だと云ふことになる。つまり、支配する者と支配される関係がどうしても善悪の前提になります。社会秩序というのは支配の秩序になるわけです。

だけれども、そういう支配構造の秩序は、三角型的です。支配構造というのは、支配する者は支配される者より常に少数なのです。そこに上下の秩序があります。ですから此の世の善悪は少数者の支配に則して極められるのであります。

しかるに、凡そ宗教的な眼から善悪を考える、「悪人尚往生す、況んや善人をや」というのは、此の世の論理と彼の国の論理を同視することになります。

仏教では、その基本的精神は慈悲にあります。如来の慈悲にあります。浄土は本願に由つて成立した仏の国ですが、その本願の本質も慈悲であります。一切衆生を救わんという慈悲の心から起されたものです。ですから慈悲の精神から云ふと、善悪の此の世はやはり苦悩という一点から捉えられるのです。善人と悪人と云ふけれども、善悪が規準ではなくて、苦悩する人ということの救いが規準になります。

そうすると苦悩しているのは、善人よりも悪人でしょう。ですから、歎異抄には、そういう悪人を「他力をたのみたてまつる悪人」と云ふてあるのです。自力をたのみたてまつる悪人なのが悪人の本質なのです。大体、自分が善人だな

どという面をしているのは、傲慢なのです。何一つ善きことは出来る人間ではないと自覚している人の方が、はるかに謙虚な人です。自分には良心などかけらもないと知る人こそ、他力をたのみたてまつる悪人でありましょう。ですから、自分の力の弱さを知っているもの、心弱きものが凡そ悪人となります。本当は心の弱さを覆いかくしている人であります。社会的には、そういう人達は殆んど落伍者であります。疎外された人達であります。社会的に大きな善人面している人と云ふのは、平気で悪いことの出来る人です。平気で悪いことの出来る人は他力をたのみたてまつるといふことはありません。本当の悪人というのは、他力をたのみたてまつるしか生きてゆけぬ人のことでもあります。「自力作善の人は、ひとへに他力をたのみこころかけたるあいだ弥陀の本願にあらず」とあります。

仏教では凡そ善悪は二世に亘るといいます。善、悪、無記というのが人間の行業の価値です。凡そどんなことをしても、それは善か悪か、或は無記であります。人間は何かをするのであります。それが単に行為ではなく行業といわれるのは、その行為には酬報されるということがあるからです。酬報の行為ということですから、因果があるということですから。何かを為せば、それは必ず酬報される結果があるということです。それを異熟といいます。異つてかえつて来るといふことです。